
白と銀

無銘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白と銀

【Nコード】

N3463Y

【作者名】

無銘

【あらすじ】

まだISが兵器として本格的に使われていなかった『白騎士事件』直前。一人の少女は月面基地建設現場で働く男達と出会う。その中にはかつて悪の組織と戦い続けていた男もいた。果たして少女はそこで何を見るのか…

キャラ崩壊・別人化・知識不足その他諸々が含まれてる可能性が高

この本は、共編者です。

（前書き）

あらすじにも書いてありますがキャラ崩壊や知識不足を露呈してる箇所がちよくちよくあると思われるのでご注意ください
後冗長ですのでご注意ください

『嫌だ！まだ死にたくない！弟が…一夏が帰りを待ってるんだ！』

『…死なせるものか！』

『よく聞いてくれ。君のスーツは大気圏突入に耐えられるように設計されているしそれに対応した装備や機能もある筈だ。やるしかない。俺もフォローする』

『で、でも…』

これはISインファント・ストラトスに関する記録音声の一部である。本来IS関連の記録や資料は全世界に大々的に公開されているか、或いはトップシークレット扱いで完全非公開かの両極端となる事が少なくない。だがこれはどちらとも言い難い。確かに大々的に公開されていえるかは微妙だが、一定の条件を満たし手続きさえ踏めば誰でも閲覧可能な比較的機密性の低い部類の資料である。

何故このような扱いかと言えばISが究極の兵器と持て囃されるようになる『白騎士事件』より少し前、まだ高性能な宇宙服としての側面が濃かった時期に行われた宇宙空間での試験中の記録であり、軍事的価値及び重要度は低いと判断されたからである。ある意味当初の理念が忘れ去られた結果と言えよう。

これはそんな誰も注目しない記録の裏にある少女と男の物語

沖一也がその少女と出会ったのは建設が進む国際月面基地にある居住区の一角だった。

国際宇宙ステーションが順調は稼働し今では月面基地を築きつつある事を一也は感慨深く思っていた。もつとも、そこまで宇宙開発が進展したのは彼による所も大きいが。

「てめえ…何で俺の指示を無視しやがった！それで事故があったらどうすんだ!？」

「最善であると判断した方法を採用したまでです。第一私に対する命令権は無い筈だ」

そんな彼の思考も金髪の男と黒髪の少女の口論が始まるとすぐに中断される。また彼女が問題を起こしたらしい。

「このアマ！特別扱いされてるからっていい気になりやがって!」

「いいぞ！やつちまえアレクセイ!」

「俺の仇もついでに取ってくれよ!」

「覚悟しろよ新入り！アレクセイは柔道黒帯なんだぜ!？」

作業員のリーダーであるアレクセイは一也より二回りは大きい。対して少女は女性にしては背は高いがやはり体格差は歴然としている。しかし少女はアレクセイを鼻で笑い

「だったら早くしたらどうだ？木偶の坊」

掴みかかってくるアレクセイの腕を少女はあっさり捻り上げる。悲鳴を上げるアレクセイの腕をそのまま押し折り

「そこまでだ」

かけた所を一也に止められる。少女は一也を睨むが鼻を鳴らすと無造作にアレクセイを放した。床に叩き付けられたアレクセイは唸りながら床に転がっている。

「懲りない連中だ」

少女はそれだけ言い捨てると部屋を出る。

「クソ、ヘンテコな宇宙服着てるだけだったのに何で特別扱いなんだよ!」

「あのスーツが特別だからだろ？あれが本格的に稼働するようになれば船外作業の効率も今までより飛躍的に上昇するって話だぜ」

「…正直カズヤが居ればそんなもんいらねえ気がするぜ」

「馬鹿！いくらカズヤでも毎回毎回出てたら不味いに決まってるだろ！」

「第一24時間365日ずっと船外作業してるなんて言ったら愚痴一つ言わずに笑顔でやりかねないぜ、あのお人好しは」

「本人がいる前で言うな馬鹿！」

作業員達の喧騒をよそに一也は少女に思いを馳せる。

彼女がここに来たのは三日前。何でも新型宇宙服のテストでこちらに来たらしく、その技術の特殊性等を考慮して月面基地の指揮系統からは独立している。その為月面基地の人間は彼女に「要請」は出来ても「命令」は出来ない事になっている。勿論月面基地のスタッフは反対したし一也も同意しかねたが結局は「政治的判断」という事で押し切られてしまった。

或いは上層部はそれは建前に過ぎず実際は問題ないと高を括っていたのかも知れないが、結果は先述の通りである。このような喧嘩は起こっただけでこれで五回目。制止されたのも含めれば両手の指に余るくらいだろうか。

「一度彼女とはじっくり話した方が良くかもしれないな…」

一也は同郷ながら何だかんだでもともに話す機会が無かった少女…織斑千冬と話す事も考えながら部屋を出た。

基地にあるトレーニングルームに設置されたランニングマシン。その一台を占拠し織斑千冬は走っていた。周囲が引く程のハイペースでひたすら走り続ける。

(…どいつもこいつも…)

不愉快だった。いきなり月まで行く羽目になった事。その理由が親友の気まぐれだった事。何より期限付きとはいえ愛する弟と引き離された事。今なら親友で主犯の篠ノ之束を本気でどつき倒すかも知れない。それくらい今の千冬の機嫌は悪い。いつもならあまり気にならない男達の視線や態度もこの時ばかりは癢に触り、機嫌はますます悪くなる一方だ。最早殺気すら漂う千冬に声をかける無謀な男など中々いない。

「隣、いいかな？」

そんな彼女に声をかける男：沖一也は余程の命知らずだろうか。

「…どうぞ」

しかし千冬はぶつきらばうな口調ながら承諾する。

「ありがとう」

笑いながら礼を述べると隣のランニングマシンで一也も走り出す。

千冬と同じペースで。並の男ならすぐ息切れするだろうペースに一也は余裕でついていく。しかし千冬はそこには疑問を抱かなかった。一也が何者であるかくらいは承知している。

「そんなペースで走らなくてもいいんじゃないか？」

「筋力が衰えるのは嫌ですから」

走りながら尋ねる一也に走りながら答える千冬。無重力の宇宙空間と違い月には地球より小さいとはいえ重力が働く。加えて月面基地には人工的に重力が働くようになっていて、それでも地上に比べるとまだ小さい。低重力で長時間過ごせば筋力は自然と衰えるので千冬の考えが間違っている訳ではない。

「…それよりサイボーグの貴方が鍛える必要があるんですか？」

「人工筋肉も鍛えれば鍛える程強くしなやかになる。無駄って訳じゃないさ」

割とストレートな質問に思わず苦笑しつつも一也は答える。

千冬が言う通り沖一也はサイボーグ…改造人間である。彼は国際宇宙開発研究所に所属する科学者であったが、自ら惑星開発用改造人間の被験者に志願してその第1号『スーパー1』となった。千冬が

知る限りでは一度壊滅した国際宇宙開発研究所の再建にも深く関わっているらしいがそれ以上は興味が無い。

「…弟さんの事が心配かな？」

「どうしてその事を…!？」

「少し君の事を調べさせて貰った。流石に君の言動は目に余るからな」

驚愕する千冬を一也が見据える。

千冬には両親がいない。今まで幼い弟を抱え必死に働いてきたであろう事は軽く調べただけの一也でも分かる。不満はあれど此処にいるのも実入りが良いという事もあるのだろう。

「その気持ちは俺にも分かる。けどアレクセイが何故怒ったか分かるか？君の独断が他の皆や君自身の命すら奪いかねないから…」

「…黙れ！」

穏やかに諭そうとする一也に千冬が声を荒げる。

「あんたは私の父親か？違っただろ！人の上っ面を調べただけで知った風に説教なんてするな！」

「違う！俺はそんなつもりじゃ…」

「煩い！何も知らない癖に！」

そのまま千冬はマシンのスイッチを荒々しく切ると振り返りもせずトレーニングルームを出た。

それを一也は黙って見送る他に無かった。

月面基地管制室の一角にあるモニタールームの前に千冬はいた。基地の時計では真夜中だ。

ここは家族と連絡が取れる唯一の場所である。その為人の出入りが多いが夜中となれば人はいないだろうと踏んだ千冬だが、どうやら先客がいたようだ。部屋の前に立ち耳をすます。

「…そうか、良い子にしてたんだな。よし、頑張ったご褒美にパパが本物の月の石を持ってきてやるぞ。大丈夫大丈夫、お前の誕生日に地上に戻る事になってるから…ああ、約束だ。じゃあな」
声の主は先程捻ってやったアレクセイらしい。あの時の猛々しさや野蠻さが嘘のように優しい声色だ。ここからでは表情は何えないがきつと穏やかな笑みを浮かべているのだろう。

(パパ、か…)

父親の気持ちは何となくだが分かる。自分は一夏の為に必死に働き、育て、見守ってきた。我ながら厳しいと思う時もあったが一夏への愛情は一時も忘れた事はない。だから、アレクセイの気持ちは分かる。

「…覗きとはいい趣味じゃねえな、新入り」

部屋から出てきたアレクセイが低く呟く。千冬はそのまま立ち去るアレクセイを黙って見送ると自身も一夏に連絡を入れるべく部屋に入るのだった。

惑星開発用マシン『Vジェット』を操りながら一也は作業現場へと向かう。と言ってもその姿はスズメバチに似た銀色の『スーパード』のそれである。一也はそのキャリアや改造人間としての能力を信頼され大抵通常の宇宙服では困難な作業を一人で担当する事が多い。今回も他の作業員達とはだいぶ離れた場所での作業となる。腕を『パワーハンド』に換え資材を運搬していると、また通信越しにアレクセイと千冬が言い争っているのが聞こえてくる。一也は溜め息をつきたい衝動を抑え腕を『エレキハンド』へとチェンジさせ作業に取り掛かった。

千冬が身に纏うI.S『白騎士』。後に『白騎士事件』で有名となる
それだが、今回は宇宙空間での作業という事で束が改修を施してお
り、大分外観や機能が異なる。特に各部に増設された作業用のサブ
アームはその象徴だ。本来千冬が作業員の中でもベテランのアレク
セイ以上の作業効率を叩きだせているのは一重に束の技術力の賜物
だろう。もっとも、今はそれらのアームは起動していない。アレク
セイとの喧嘩の真っ最中だからだ。

『いい加減にしろってんだ！ちゃんと手順って物があるって何回言
つたら分かるんだ！？』

『それはそちらの都合だ。こちらにはこちらのやりやすい方法があ
る』

この調子で暫くやり合っている。当初は二人とも作業しながらやっ
ていたが徐々にヒートアップしていき今では二人共作業を止めてい
る。

『もう限界だ！後は俺一人でやる！お前はさっさと帰れ！』

『アレクセイ！馬鹿な事言ってんじゃねえ！』

遂にキレたアレクセイの言葉に同僚達が慌てる。基本的に危険な作
業が多い基地建設は一也を除けばツーマンセルが基本だ。特にアレ
クセイは経験を、千冬はスーツの性能を買われて一也程ではないが
他の作業員よりやや離れた危険な場所を担当している。ただでさえ
危険が伴うのにアレクセイ一人での作業中に万が一生命維持装置に
異常が発生したりすれば死が見える。だが千冬は

『了解した』

とだけ答えるとスラスターを噴かし基地へ帰還するのだった。

万が一、という物は最悪の時に発生するのが常である。

基地に戻った千冬は作業に戻る準備をしていた。流石に一人にすれば少しは頭も冷えるだろう。そんな軽い気持ちだった。だが基地内の空気がおかしい。嫌な予感がした千冬は管制室へと向かう。

管制室には多数の作業員が詰めかけていた。

「諦めんなアレクセイ！まだ死んだって決まった訳じゃないだろ！？」

「そつだ！カズヤだって今そつちに向かつてる！」

『馬鹿：言つなよ…あと10分で…何が出来るんだよ…？』

生命維持装置の故障。勿論備えはあるが最後の手段だ。それを使つてあと10分。それまでに帰還しなければアレクセイの命は、無い。

『クソ…安請け合いなんてするんじゃない…頼む…息子に…パパが…嘘つきで…ごめんなって…伝えて…』

千冬は駆け出していた。

私が意地を張らなければ。私が馬鹿な真似をしなければ。私があんな軽率な行動をしなければ。他の誰でもない、私のせいだ。私が一人の子供から父親を、家族を奪ってしまう。

（けどアレクセイが何故怒ったか分かるか？君の独断が他の皆や君自身の命すら奪いかねないから…）

この言葉の意味が今なら嫌という程分かる。

急造の『白騎士』格納デッキに向かいISを装着する。計器をチェックする時間すら惜しい。そのままスラスタを最大出力で噴かしアレクセイの下へ向かう。

（…必ず助ける！）

アレクセイと、名も知らぬその息子へ誓いつつ千冬は『白騎士』を纏い月面を駆ける。

(間に合わない…！)

遠過ぎる。仮にアレクセイの下へ到着出来ても基地へ帰還する前にアレクセイは…ほぞを噛む一也だが千冬が無断で出たとの報告が入る。

『今は彼女を信じよう』

一也は自らに言い聞かせるように呟いた。

通信機から同僚達の声が聞こえてくる。必死に励ましてる奴もいれば罵倒して奮起させようと考えてる奴もいる。

(こういうのも悪くないか…)

きっかけはガキの頃弟とやった月にいるのが兎か蟹かの言い争いだつた。俺が兎で弟は蟹。俺は兎がいるって事を証明したくて宇宙飛行士を、弟は蟹がいると証明したくて天文学者を目指したつて。そして今では俺は月面基地で働いて、弟は大学で教鞭を執る天文学の教授だ。久しぶりに弟に会った時に結局月には兎も蟹もいなかった。言ってやったらあいつ大笑いしてたよな。訓練は死ぬ程辛かった。親にも苦勞をかけたしソーニヤも俺なんかと結婚しちまったばつかりに今でも苦勞をかけたばなしだ。それでも親父もお袋もソーニヤの俺が話すクソつまらないだろう仕事の話をいつも笑って聞いてくれた。それもこいつでおしまいだ。今まで好き勝手やってきたツケって事が。ベッドの上で死ぬ気は無かったけどまさか月の上で死ぬなんてな。でも

(セルゲイ…)

あいつはまだ4つだ。俺の話にいつも目を輝かせて将来は宇宙飛行

士になりたいつて言ってたな。ごめんな、パパはもうお前と会えないんだ。ごめんな、パパはお前との約束を果たせない嘘つきなんだ。ごめんな、パパが変な意地張ってこんな所で終わっちまうダメな宇宙飛行士だよ…

『けどよ神様…よりによつて…最期に見るのが…クソ生意気な新入りつてのは…ちよつと酷くねえか…？』

アレクセイの救助が手間取った理由は簡単だ。足が無いのである。宇宙服には推進ノズルが付いてはいるがそこまで速度は出ないしそもそも長距離の移動は想定していない。小さいとはいえ重力のある月なら尚更だ。シャツルやロケットは大き過ぎる。だがISは人間サイズながら自前のスラスターが搭載されている…最新鋭の戦闘機すら歯が立たない圧倒的な機動力を生み出す程の。それを最大限使えば十分間に合う。

『…そんな口が利けるならまだ大丈夫そうだな』

『へっ…てめえの顔を見れば…誰だつて…そう…言いたく…なるさ…』

極力冷静を装いつつ千冬はアレクセイを抱えスラスターを噴かし基地を目指す。

タイムリミットまであと5分を切っていた。

千冬からアレクセイを確保したとの通信が入ると管制室は大いに沸き立った。

「やったなアレクセイ！これでツケを踏み倒される心配は無いつて

こつた！」

「心配かけさせやがって！後で奢れよ！」

「おいおい不味い宇宙食奢られても困っちゃうな！」

基地からの指示で帰還した一也が入ってくるのと一也の労を思い思いにねぎらう。

だが一也は手近な端末を操作する。現状のアレクセイのバイタルデータが表示される。それを一瞥すると一也はオペレーターからマイクをひったくり千冬に告げる。「コントロールから『白騎士』へ！アレクセイは危険な状態だ！繰り返し返す…！」

(…そんな…！)

一瞬耳を疑う千冬だが送られてきたデータを見て信じざるを得なかった。血圧、心拍数が急速に低下している。

(…油断した！)

ISにはPICハッシュ・イナージェル・キャンセラーが搭載されており、通常ならば人体に大きな負担がかかる機動を行っても操縦者の負担にならないようになっていた。だからこそ千冬はアレクセイの下に全速力で飛ばしても素早く基地までとって返せたのだ。だがアレクセイの宇宙服にPICは搭載されていない。元々生命維持装置が故障し予備の酸素を極力節約しようと無理をしていたアレクセイの弱った肉体にISの高機動に耐えられるだけの余力が無いのだ。それでもまだ辛うじて意識があるのは訓練の成果だろう。

このまま行けばアレクセイの肉体が保つかは分からない。かと言って速度を落とせる程時間的余裕は無い。どうすればいい…千冬は悩む。

「…今はアレクセイの生命力に賭けるしかない。聞こえるなら返事をしろアレクセイ！」

『ああ…』

一也の通信に弱々しいながらも答えるアレクセイ。まだ意識はある。「おいアレクセイ！てめえクソ生意気な新人りに看取られて死ぬなんて絶対嫌だつて前々から言ってたじゃねえか！」

「そうだぞアレクセイ！よりによってお前がそんな死に方するなんて情けねえだろ！」

「久しぶりに奥さんと息子に会えるって言ってたじゃないか！」

「親より先に死んで奥さんと子供残して死ぬなんて最低じゃねえのかよ！」

思い思いの言葉でアレクセイを励ます面々。だがアレクセイの返事は弱まる一方だ。周囲に絶望感が漂う中、千冬の通信が聞こえてくる

『誰か！誰かアレクセイの息子の名前を知らないか！？』

意外な質問に一瞬沈黙する一同。

『頼む！教えてくれ！頼む…』

「…セルゲイだ！」

千冬の問いに一也がはっきりと答える。

「アレクセイの息子の名前は、セルゲイだ！」

一か八かだ。だが何もやらないよりはいい。

『アレクセイ、聞こえるか？』

『…ああ』

微かだがちゃんと答えている。

『息子の名前、セルゲイって言うんだよな？』

『…ああ』

『セルゲイに本物の月の石持って帰ってきてやるって約束したよな？』

『…ああ』

『ならここで死んでセルゲイにパパは嘘つきだって思われてもいいのか？』

『…ああ』

『嘘言っな！』

千冬は吠える。そんな事はさせない。絶対にアレクセイが嘘つきだなんて言わせない。

『お前だってそんな事本気で思っただろ！？セルゲイに会いたいだろ！？本物の月の石届けてやりたいんだろ！？』

『…無理だ』

反応が変わる。

『無理とかじゃない！お前がここで死んだらどうなる？セルゲイがお前を嘘つきだと思うだけじゃないんだぞ！そりやお前は死ねばそれで楽だろうな！後の事なんか知ったことじゃないだろうからな！けどな…残されたセルゲイの事を考えた事はあるか？たとえどんなクソつたれな親でも辛くて悲しくて痛くて泣きたくなるに決まってるだろう！ましてや大好きなお前が死んだらセルゲイはそれよりずっとずっと辛くて悲しくて痛くて泣きたくなるだろうが！』

千冬は親と死別した訳では無いから分からない。だが千冬は続ける。
『セルゲイがそうなってもいいのか？いいわけないだろ！セルゲイが泣いてたらお前の胸も苦しかっただろ！？セルゲイが笑ったらお前も嬉しくなっただろ！？お前は苦しくても辛くてもセルゲイの笑顔を見てきたからこそ頑張っただけだ！最低だ！父親だったらセルゲイが一人前になるまで無責任に死ぬな！』

『…』

アレクセイの反応が無い。

(間に合え！間に合え！間に合え！)

基地が見えてくる。あと少しだ

(間に合え！間に合え！間に合ってくれ！頼む間に合ってくれよ！)

アレクセイのバイタルデータが更に低下してきている。もう時間が無い。

(間に合ってくれ…間に合って…お願い間に合って…！)

計器類が異常を警告するが無視してスラスタを噴かし続ける。

(間に合って…間に合って…お願いだから間に合ってよ…)

格納デッキ内部。千冬は白騎士を駆使して散乱した機材や内壁の修理を行っていた。それを終えると白騎士を脱ぎ、格納デッキを出た。「お疲れ様」

出口の横に一也が立っていた。そして水が入ったボトルを千冬に渡す。千冬は水を飲み一也に向き直る。

「…お手数をおかけしました」

「いや、提案したのは俺だからね。本当なら俺が片付けるのが筋なんだろうけど…」

殊勝に頭を下げる千冬に一也は首を振り笑う。

全速力で基地に突っ込んだ千冬だが、PICを駆使してもデッキ内では止まり切れない事が判明、やむを得ず一也はスーパー1のパワーハンドと重力制御装置を使い極力アレクセイに負担がかからない様に突っ込んでくる白騎士を無理矢理止める事を提案、実行した。

幸い作戦は成功しアレクセイは無事医務室に運ばれたが、その際スラストの余波等で格納デッキが滅茶苦茶になってしまったのだ。そこで千冬が自ら申し出て一人で後片付けた、というのが現在の状況である。

「…行こうか」

「…はい」

一也に促され千冬はアレクセイのいる医務室へと向かった。

医務室のベッドの上で目覚めたアレクセイは最初状況を理解出来な
いでいた。

（地獄か天国かは知らねえが死後の世界ってのは月面基地の医務室
そっくりなんだな…）

そんな事を考えていたがやがて自身が生きているという事を理解し
た。身体の節々が痛い。腕を動かすのも怠い。

そんな事を考えていたアレクセイだがふと横を見る。

千冬がいる。

「…」

「…」

気まずい。もの凄く気まずい。とりあえず何を言うべきだろうか。

「…ごめんなさい」

アレクセイの考えがまとまらぬ中先に沈黙を破ったのは千冬だった。

一也に付き添われ医務室へと向かった千冬は独りアレクセイのベッ
ドの横に座っていた。一也は気を利かせたのか医務室を出ている。

暫くしてアレクセイが目を覚ます。状況が理解出来ていないのか周囲を見渡していたが千冬と目が合った。沈黙の後、口を開く。

「…ごめんなさい」

謝罪の言葉だ。

「ごめんなさい…ごめんなさい…」

これは自らの身勝手さが招いた事だ。一步間違えれば取り返しのつかない事になっていた。

「ごめんなさい…ごめんなさい…ごめんなさい…」

愚かさ、傲慢さ、情けなさから自然と涙が零れてくる。それでも千冬はただアレクセイに謝る事しか出来なかった。

「いや、なんだ…分かれればいいんだ分かれば」

アレクセイも困り顔だが千冬は謝るのを止めない。謝っても謝りきれない事をしてしまった。

「…ありがとな」

「…えっ？」

「お前、俺の事必死に助けようとしてくれただろ？…あんだけ大声出されりや嫌でも覚えてるといっつか…それに俺の方にも原因はあるからな…俺の方こそすまなかった」

そう言つと千冬に頭を下げるアレクセイ。思わぬ礼と謝罪に戸惑う千冬。そこに多数の乱入者が訪れた。

「この野郎本当に死んだかと思つたじゃねえか！」

「どうせお前のこつた！死神ぶん殴つて追い返すくらいの事はすると思つてたけどよ！」

「何言つてやがる！てめえは勘違いしてワンワン泣いてたじゃねえか！」

それまでが嘘の様に騒がしくなる医務室。アレクセイもいつもの調

子を取り戻していた。困惑する千冬だが意を決して声を上げる。

「あの…ごめんなさい」

頭を深く下げ謝る千冬に逆に困惑する一同。だが

「…いいって事よ」

「よく考えたら先に手出したのは俺達だったしな」

「全くだ。こつちこそ悪かった」

「それとアレクセイを助けてくれてありがとな」

「いやあ格好良かったぜ本当！こつ、ビューツって飛んでっさ！」

「しかもよく見りゃ可愛い顔してるじゃないの！」

「おまけにスタイルも良いときたもんだ！」

「俺フアン1号になつちやおうかな！」

「抜け駆けすんじゃないやねえこの野郎！俺が先に目付けてたんだからな

！」

「何吐かしやがる！てめえ散々クソ新入り言ってたじゃねえか！」

「俺なんかこれからの夜の…」

「間違つても本人の前でんな事言うんじゃないやねえ馬鹿！」

と笑う。啞然とする千冬に皆の意志を代弁するかのように一也が語る。

「…君は問題を起こした。みんな煩く言ってきた…こんな事故が起こらないように。でも君は聞かなかつた。そして今回の事故が起こってしまった」

うなだれる千冬。

「…でも君はその責任を取ろうとして俺達の大切な仲間を命懸けで救ってくれた。改めて言わせてもらつよ…ありがとう」

「いや、そんな…頭を上げて下さい」

深々と頭を下げる一也に慌てる千冬。

「…宇宙では少しのミスが命を奪ってしまう。だからこそ厳しくする時もある。でもそれだけじゃない。厳しい環境だからこそ辛い時は支え合い嬉しい時は喜び合い泣くのも笑うのも一緒。それが俺達

なんだ。言い換えれば戦友とかもう一つの家族って所かな」

「つまり宇宙に出たら皆兄弟って事よ…そうそう、アレクセイ。例のアレ言ってやれよ」

「おうよ！…新入り、お前はこれからこの月面基地の一員だ。辛い事もあるだろう。嫌な事もあるだろう。だが辛い事があるなら俺達を頼ればいい。嫌な事があるなら俺達に愚痴ればいい。理由は何であれここに来た以上俺達は家族だ。時に厳しく時に優しく苦楽を共にする兄弟だ。最後に…月面基地へようこそ！歓迎するぜ、オリムラチフユ！」アレクセイは笑いながら色々あつて言えなかった歓迎の辞を千冬に送るのだった。

「それとアレクセイ、後で始末書提出だよ」

「嘘だろ！？」

「贅沢言うなよ。これでも頑張った方なんだぜ？」

アレクセイが事故後3日にして復帰を果たしていたのを見た時一也は一瞬アレクセイは改造人間かと思ってしまった。どうやら医者の話だと特に後遺症もなく至って健康らしい。

千冬の方も周囲と打ち解けたのか時折冗談を飛ばしたりと来た時に比べるとだいぶ態度が軟化している。

そんな千冬の様子を微笑ましく思いながらも一也は別室で型を練習していた。赤心少林拳…一也がかつて自力でスーパー1に変身する極意を得る為に門を叩いた拳法の流派。だが一也にとって赤心少林拳とは精神的な支柱でもある。そして師匠の玄海老師、兄弟子の弁

慶は自分にとって家族同然だった。しかし…
そんな邪念を振り払い一也は鍛練に没頭するのだった。

「…全く、自分の弟ながら情けない。男ならもう少し…」
またか、と言った表情を浮かべながら男達は千冬の話に付き合われていた。

基地にも食堂は存在する。勿論地球と同じという訳にはいかないがそれなりにメニューは揃っている。味はピンキリだが輸送の手間を考えれば贅沢は言えない。少なくとも農業プラントが完成しない内はこのままらしいので改善されるのは当分先の事だろう。

そこで千冬は周囲の男を捕まえ話を聞かせていた。大抵は自分の弟に関する愚痴が多い。

「はいはい、イチカは可愛いイチカは可愛い」
アレクセイが茶々を入れる

「…そんな言い方しなくてもいいじゃないですか」
千冬はムツとした表情で答える。打ち解けてからは基本的に作業員達とはタメ口だがあの時以来アレクセイと一也には敬語を使っている。

実際愚痴部分は前フリに過ぎずその後弟自慢や溺愛っぷりを長々と話し出すのだから聞かせられる方はたまったものではない。

「こりゃ弟の将来が心配だぜ…」

「姉離れ出来なくて彼女とか出来ないんじゃないか？」

「むしろ弟離れ出来ない姉に彼氏が出来ない可能性が高いな」

「案外そっちの道に走っちゃうかもしれない…」

男達のため息を付く。千冬の話最後まで聞くのは一也くらいだ。
大抵千冬の長々とした自慢話をにこやかに笑って聞いている。

「カズヤは余程のお人好しなのか、忍耐強いのか…」

「…だけじゃねえ気もするけどな」
作業員達の中では古株で比較的一也との付き合いの長いアレクセイだけは何となく一也が千冬の話の聞いている時の物悲しさに感付いていた。

一通りの型稽古を終えた一也はトレーニングルームのランニングマシンを使い走り込みをしていた。そこに千冬が声をかける。

「隣、大丈夫ですか？」

「勿論」

この前とは逆だな、などと考えつつも一也は快諾する。

「作業は捗ってるかい？」

「ええ、皆が助けしてくれますから」

「スーツの方の調子は？」

「今の所は問題無いみたいです」

そんな他愛のない話をしながら走っていた二人だが千冬が尋ねる。

「どうしてサイボーグに？」

ある意味当然の疑問である。わざわざ自分から人間の身体を捨てるなど余程の物好きか余程の事情があつての事だろう。そんな疑問に一也はさも当然とばかりに答える。

「人類の夢の為、かな」

「…そうですね」

自分とは違い過ぎる。別に自分がISに乗る理由を恥じる気はさらさら無いが、一也の気宇が大き過ぎる事は認めざるを得ない。

「そんな大した事じゃないさ。それに誰かを守る為って言うのは立派な理由だよ」

「…それが弟でも、ですか？」

「家族を守りたいって思う事の何処がおかしいんだい？」

千冬の内心を読んだのか―也は屈託のない笑みを浮かべながら答えた。

「じゃあな、アレクセイ。月の石ちゃんと届けてやれよ?」

「おう、暫く後を頼むぜ? ジョージ」

「それじゃ地上に戻ったらゆっくり休めよ? カズヤ」

「中々そうもいかないけど努力はするよ、クラーク」

月面基地は定期的に人員がローテーションで交代される。人にもよるが早くて2ヶ月、遅くとも半年経つと半ば強制的に月面基地要員は地上勤務へと回される。あまり低重力に慣れ過ぎていると筋力その他が衰え地上に適応出来なくなるからだ。例外は一也くらいだが所属する国際宇宙開発研究所への報告もあるのでたまに一也も交代に合わせて地上へ降りる事になる。

今回はそれに加えて千冬も基地を離れる事になる。元々1週間前後の滞在予定だ。名残惜しいが仕方ない。

「身体に気を付けるよ? 地上の重力は意外とキツイぜ」

「弟にもよろしくな」

「さっさと彼氏作れよ?」

「短い間だったがお前と基地に居れて良かったぜ」

見送りに来た者達が名残惜げに次々と声をかける。最初に来た時から考えられなかった光景だ。千冬も思わず言葉に詰まるが

「ありがとう」

この時の偽らざる気持ちを素直に言葉にする事にした。

こうして基地を離れる者に乗せたシャトルは月面基地を離れ、一路地球を目指し飛び立った。

そんな別れを経験した後いきなり衛星軌道上で作業しろなどと言われたらいくら親友の言葉とはいえ少々興醒めには違いない。

『そう腐るな、どの道シャトルの調整で地上降下はお前の作業が終わった後になるんだしよ』

白騎士を身に纏い衛星軌道上を飛ぶ千冬にアレクセイが通信を入れる。シャトルとは中々繊細な物で小さな異常が重大な事故を招きかねない。地球への航行中にそれが見つかった為、現在は国際宇宙ステーションで点検作業が行われているが幸い異常はすぐ直せる物だった為、再調整した上で地上に降下する事になった。

そこで暇を持て余していた所に束から廃棄衛星の軌道修正というミツシヨンが入ったのだ。何でも軌道が逸れた為シャトルの降下軌道とぶつかる可能性があるらしく、さっさと大気圏突入させてやって欲しいとの事だ。

『君なら心配ないと思うが…引力には注意してくれ』

一也も千冬に通信を入れる。本当は一也もサポートとして作業に当たる事を申し出たのだが地上の管制センター…というより篠ノ之束の意向で千冬の単独作業となったのだ。

そんな事を思い返している内に標的を発見すると千冬は作業を開始すべくスラスターを噴かし接近した。

国際宇宙開発研究所。国際宇宙ステーション及び月面基地にも指示を出す宇宙開発の司令塔とも言える場所である。その管制センターを間借りするような形で千冬と同じ年頃の一人の少女がいた。彼女

の名前は篠ノ之束。ISを一人で理論実証・開発した天才である。一見すると兎の耳に似た髪飾りと千冬に勝るとも劣らないスタイルの良さが際立つ美少女といった感じだが、管制センターのスタッフは誰も彼女と話そうともしないし彼女もスタッフには目もくれない得てして天才とは専門分野以外で何かしら重大な欠点を抱えている事も少なくない。彼女も例に漏れず重大な欠点がある…極度の対人障害だ。

彼女は興味の無い事にはとことん興味を持たず、それは人間相手でも例外ではない。その為彼女は興味がある自分と身内以外の人間を認識出来ない。言い換えれば身内以外は完全に無視して話すどころか見る事さえしない。しかも身内の範囲は非常に狭く実妹の筈と親友の織斑千冬、及びその弟で今は管制センターに招かれている一夏くらいで両親すら辛うじて判別出来るレベルという有様である。

そんな彼女がこんな場所に間借りという形で居れる理由は千冬の尽力があつたからである。もっとも、彼女は千冬が努力した事は知っているが千冬が他ならぬ束の父親の縁を使った事、そしてその父親の友人で国際宇宙開発研究所へ口利きした人物がいる事までは知らないし興味も無い。

「お久しぶり、ちーちゃん。月を見る度ちーちゃんの事を思い出してたよ」

そんな彼女が親友に発した第一声は少々間の抜けた物であつた。

『目標との接触到に成功した。そちら側から指示を頼む』
慣れているのかやはり機嫌が悪いのか淡々とちーちゃん…千冬は用件を述べる。

「もしかしてちーちゃん機嫌悪い？」

『…少しな』

触らぬ神になんとやら。束は早速頭を切り替え千冬に指示を出そうと思いを巡らせる。

「それじゃ、早速だけど…」

管制センターに場違いな程に若い少年…織斑一夏はセンター内を見渡し目を輝かせていた。当然かも知れない。様々な見慣れぬ機械やモニターに移る様々な映像に興味をそそられてしまう年頃なのだから。自分よりいくつか年下のセルゲイという名の少年と共にセンター内を『探検』していた一夏だが係員により仲良く捕まり、今ではセンター中央後ろで自分達を預かる事を申し出た初老の男性と話し込んでいた。

「おじさん、もっと『仮面ライダー』のお話聞かせてよ！」

先ほどから一夏とセルゲイの両少年は男性にかれこれ一時間ほど『仮面ライダー』の話をねだっていた。悪のある所に嵐のように現れて悪を退治すると嵐のように去っていく仮面の男。バイクに跨がり人類の自由と平和を守る為に戦う正義の戦士。男性が語るそんなヒーローが活躍する話を聞かされて少年達の興味を惹かない筈が無いのだ。

(すこし不味い事をしたかな…)

少年達の視線に合わせるようにしゃがみこんでいた男性は内心苦笑する。無理もない。ここにいる一夏とセルゲイ…さらに言えば束以外の民間人は皆月面基地から帰還してくる者達の身内なのだから。勿論男性とて例外では無い。それなのに自分が仮面ライダーの話ばかりしてしまっていたら少々ばつが悪いというものだ。しかも悪いことに少年達は次の話を聞こうと目を輝かせながら自分の話を待っているのだから。

男性が少々視線を泳がせるとふと篠ノ之束の姿が目に入る。彼女を国際宇宙開発研究所へ口利きする形となったのは他でもなく彼である。といつても直接彼が口利きした訳ではなく自分がよく知る男を通してだが。男性と束の父親である柳韻とはそれなりに長い付き合いで気心のしれた友人同士だ。その柳韻が恥を忍んで自分に頼んだ

とあれば引き受けなければ男が廃る。そう思って引き受けたが内心偏屈を通り越した束には辟易していた。

(一也にはかなり無理を言ってしまったな)

そんな事を考えながらも男性は二人の幼きギャラリー相手にどんな話をしようか思案を始めた。

「ちよつと、ちーちゃん…それどういう事？」

だが管制センター内に漂い始めた不穏な空気に気付くと男性…谷源次郎は思考を止めて立ち上がりモニターに視線を向けた。

『どうしたもこうしたも…さっき言った通りだ…!』

アレクセイと一也が見ていた限り千冬は順調に作業を進めていた。束が制作した作業用アームの性能もあるがやはり千冬自身が月で実際に船外作業を経験した事も大きかったのだろう。従事していた期間は短かったが千冬の飲み込みはそれを考慮しても非常に早い。これは間近で作業を見ていたアレクセイと一也の共通認識である。実際千冬は順調に作業を進め、後は国際宇宙ステーションに帰還するのみと思われていた。

「そのサブアームつてのを何とかして外せないのかよ!？」

焦りながらもアレクセイは千冬に尋ねる。地球の引力は月のそれとは比較にならない。もし白騎士が地球の引力に完全に捕まってしまうたら最大速でも離脱は難しいだろう。

『今やつてます!…駄目だ、完全に隙間に挟まって動かせない!』
衛星を固定していたサブアームの先端が完全に挟まれて白騎士は殆ど身動きが取れないのだ。必死に引き剥がそうと千冬もがいているがまるで動きがない。しかも悪い事に作業は殆ど終了していた為衛星は落下軌道に入っているのだ。このままいけば白騎士も衛星共々地上へ落下するだろう…大気圏突入時の摩擦熱に耐えられれば、

だが。

「アームそのものを本体から排除出来ないか!？」

流石の一也も驚きを隠せない。ここは自分が出るか…一也がそんな事を考えた矢先、地上の管制センターから指示が飛ぶ。

「ちーちゃん、メインスラスタの出力を最大にして!その位置から燃料電池を爆発させて抜けられる筈だから!」

束の発言に管制センター全体が一瞬フリーズする。無茶だ。分の悪い賭けを通り越して賭けとして成立してるかも怪しい。だが束は確信していた。あのちーちゃんなら、自分の作った白騎士なら絶対にいけると。束が千冬と白騎士に絶対の信頼を置いているように千冬もまた束を信頼していた。故に回答は迅速だった。「分かった、やってみる!」

メインスラスターに出力を回す。そしてそのまま一気に最大まで噴出す。実に単純な作業だが効果は抜群だ。

燃料電池が爆発するとその拘束は僅かに弛む。チャンスだ。そのまま最大戦速で一気に引き剥がしにかかる。耐え切れなくなった衛星はバラバラとなり白騎士はようやく戒めから逃れた。

(これで…帰れる)

確かに一也が言う通り引力が強いがこのまま白騎士のスラスター出力を最大にすれば国際宇宙ステーションに帰れる。そう考えた千冬はスラスターの出力を最大に…

(出来ない!?)

推力は上がらないどころか下がりつつある。この状態が続けば引力

で地表に…
千冬の脳裏に絶望がよぎった。

さしもの束も不測の事態の連続に思考に集中せざるを得なかった。
だが原因も、最適な解答も見つからない。
束の思考には穴がある…それは千冬が常に最高の動きを最高の判断で行うと信じ切っている事である。

だから束は千冬が稚拙な行動…例えばたかが死にかけた一宇宙飛行士を助けるためだけにスラスタに異常をきたすほどの出力で月面を駆け抜ける…をする事など想定していない。最初から頭に無いのだ。

故に束の思考は堂々巡りを繰り返すのであった。

一方、アレクセイは直感的に白騎士の不調の原因に気付いていた。
知識があるわけじゃない。ただの勘だ。

『…あの後ちゃんとか点検整備した筈だったんですけどね…きつと開発者にしか直せない部分なんでしょう』

どうやら千冬もアレクセイと同じ結論に至ったようだ。

「お前…何で…」

『それ以上は言わないで下さい。貴方のせいじゃない…それに私も後悔なんかしてない』

アレクセイの言葉を千冬が遮る。やはり俺を助けた時に…

「馬鹿野郎！てめえ今にもくたばっちまいそんな事言ってんじゃねえ！待ってる！今すぐ拾いに行つてやる！」

アレクセイは宇宙ステーション管制室を飛び出そうとする。

「何しようってんだアレクセイ！」

「決まってるんだろ！シャトルであいつを…チフユを助けるんだよ！」

「無茶だ！そんな事したら俺達まで…」

「無茶でもやるんだよ！あいつに助けられたのに…やっと息子に会えるのに…あいつを見殺しになんか出来るか！どきやがれ！てめえらがやらねえってんなら俺一人でも…！」

「おい！カズヤがいねえぞ！」

揉み合いの最中、誰かがいない事に男達は気付いた。

管制センターも混乱しているのかこちらに指示は出ていない。この状況では人間・沖一也として、惑星開発用改造人間・スーパー1として出来る事はもう無いのかも知れない。

（だが、仮面ライダーとして出来る事なら…ある！）

彼女を…織斑千冬を助ける。それが今の俺に…仮面ライダーとしての俺に出来る事だ。

氣息を整え、全身に巡らし、構える。

「変身！」

掌で作った梅花が開く時、ベルトの風車『サイクロード』が回り、一也の肉体を改造人間のそれに変える。

（待っている！必ず…必ず助ける！）

銀の腕に銀の体、銀の心に赤い正義の血潮を燃やし9番目の仮面ライダー…『仮面ライダースーパー1』は少女を助けるために宇宙へ飛び出し、そのまま闇を切り裂く銀色の流星となった。

一夏は不安そうな表情でモニターや周囲を眺める。幼いながらも状況が悪化している事は肌で感じていた。千冬姉はとても危ない目に遭っているんじゃないだろうか。千冬姉はもう二度と帰ってこないんじゃないだろうか。嫌だ。そんなの絶対に嫌だ。

「おじさん、千冬姉は大丈夫だよね？」

一夏は不安そうに源次郎に尋ねる。

「ああ、大丈夫だとも。君のお姉さんは強い。それに仮面ライダーが助けてくれるさ」

不安げな少年を励ますように源次郎は一夏の手を優しく握りながら言い聞かせる。

(一也、この子のお姉さんを助けてやってくれ…)

同時に源次郎は宇宙にいるであろう男に祈るのであった。

千冬は最後まで引力に抗おうとしていたがやがて無駄と悟り親友に尋ねる。

『…白騎士で大気圏突入は出来るか？』

『無理だよ！理論上は可能だけど…いくらちーちゃんでもそのシールドエネルギー残量じゃ…！』

珍しいな、お前がそこまで狼狽するのは。後で録音したのを聞かせてやりたいくらいだ。だが事実だ。エネルギー残量は半分を切っている。仮に突入しても途中で燃え尽きるのがオチだろう。

アレクセイに言った言葉は嘘じゃない。けど…

(一夏…)

未練はある。一夏にはもう会えない。一夏が辛い時にも側にいてやれない。一夏の笑顔ももう見れない。一夏の声ももう聞けない。ただ私は骨さえ残さずに一夏をずっと悲しませるだけだ。

(嫌だ…そんなの嫌だ…)

千冬は無駄と分かかっていても叫ぶ。叫ばずにはいられなかった。

『嫌だ！まだ死にたくない！弟が…一夏が帰りを待ってるんだ！』
『…死なせるものか！』

助けを求める少女の下に銀の流星が飛び込んだのはその直後であった。

時間が無い。このままでは彼女は燃え尽きる。逸る気持ちを抑えつつ一也：スーパーは千冬に語りかける。

『よく聞いてくれ。君のスーツは大気圏突入に耐えられるように設計されているしそれに対応した装備や機能もある筈だ。やるしかない。俺もフォローする』

提出されていたマニュアルを予め読み込んでおいたのが幸いした。勿論全機能を知ってる訳ではないが大気圏突入可能な事は確かだ。分の悪い賭けだが待つよりはいい。

『で、でも…』

しかし親友にして開発者の束に無理と言われた千冬の歯切れは悪い。束も畳みかける。

『そうだよちーちゃん！待ってて！今もつといい方法を…』

『俺を信じてくれ！』

迷いを振り払うかのように一也は叫ぶ。

宇宙ステーションの管制室では男達が固唾を呑んで状況を見守っていた。最早自分達の手の及ぶ範囲じゃない。誰もがこうする他は無かった。

「チフユ！てめえいつからそんなケツの穴が小せえ女になりやがった！カズヤが…てめえの家族が、兄弟が信じらんねえってのか！？」
通信機に向かつて叫ぶアレクセイは違ったようだ

「カズヤも情けねえ奴だぜ！てめえの家族を、兄弟を信じさせられねえなんてよ！」

これだけは…これだけは言わなければ

「チフユ！カズヤはな、人の為に改造手術受けてどんなに危険な現場でも愚痴一つ言わねえで笑顔で作業しに行く筋金入りのお人好しなんだ！そいつがお前を騙す真似だけはしねえ事だけは俺が保証してやる！」

「カズヤ！そいつはてめえの知ってる通りどうしようも無く生意気でブラコンで可愛げの欠片もねえ！けどな、俺を助ける為に機体ブツ壊して俺なんその為に泣いて謝るくらいの子直者だ！誠意見せりや応えてくれるって事くらい分かってるだろ！？」

ここはまだ宇宙だ。だから俺達は…

「俺達はまだ兄弟だ！俺もチフユもカズヤも、短けえ間でもこんな厳しい環境と一緒に切り抜けてきた兄弟じゃねえか！？チフユ、もしてめえがカズヤを信じらんねえならそれでいい。代わりにカズヤを信じる俺を信じる！カズヤ！てめえがチフユに信じらんねえならそれでいい。代わりに俺がチフユの分までお前を信じてやる！」

「だから…絶対生きて帰ってこい！待ってる奴の為に絶対だ！カズヤ！もしチフユを死なせたりてめえが死んだりしたらただじゃおかねえ！チフユ！もしカズヤを死なせたりてめえが死んだりしたら覚悟しろよ！俺も絶対…絶対生きて待ってるからな！」

乱入者達を無視して対応策を考える束。彼女にとって一也など端から眼中にない。だが何者かにマイクを取り上げられる。

「おじさん…？」

一夏が首を傾げる。取り上げたのは源次郎だ。我慢出来なかった。例え友人の娘でも無為に一也の努力を、少女の命を、そして少年の家族をみすみす奪わせたは無かった。

「織斑一夏君のお姉さんだね？まだ諦めちゃいかんぞ！一夏君は君が帰ってくるのを待ってるんだ！それと彼は頼りにしていい！彼は人類の自由と平和を…そして君を守る仮面ライダーなんだから！」
一夏は目を見開く。源次郎は続ける。

「だから必ず帰れる！君には仮面ライダーが…君の為にどんな困難でも打ち払う仮面ライダーが付いてるんだ！だから絶対に諦めちゃいかん！後は君がほんの少し勇気を出すんだ！そうすれば…」

(アレクセイ、さん…)

(おやつさん…)

押し黙る二人。そこに意外な通信が入る。

「千冬姉…聞こえる？」

「一夏！？聞こえてるぞ！」

一夏だった。どうやら源次郎が一夏に渡したらしい。

「良かった…千冬姉、大丈夫？」

「ああ、私は大丈夫だ」

「一つ聞いていい？」

「何だ？」

「千冬姉…帰ってくる？」

「…」

沈黙する千冬。そんな保証は出来ない。

「織斑一夏君だね？大丈夫、必ず帰ってくるよ。俺が保証する」
しかし一也が割り込みはつきりと肯定する。

『もしかして、仮面ライダー？』

『そうだよ』

『ならお願いしていい？』

『勿論』

一瞬の間、そして

『千冬姉を…千冬姉を守って！』

ごく短い、しかし一夏の魂の叫びだ。誰もが…束すら沈黙した…ただ一人を除いて。

『守るとも！君のお姉さんはこの俺…仮面ライダースーパー1が絶対に守ってみせる！』

一也…仮面ライダースーパー1は力強く即答する。

『本当！？約束だよ！？』

『ああ！約束だ！君の所に着くまで必ず護り抜く！』

互いの肩を組む形で一也と千冬は大気圏突入の準備をしていた。スーパー1が重力制御装置で減速させながら『冷熱ハンド』の冷却ガスで摩擦熱を和らげようというのだ。そうすれば今の白騎士でも突破出来るがスーパー1の負担は重い。

『ありがとう、信じてくれて』

そんな事も気にせず一也は千冬に礼を述べる。しかし千冬は黙って首を振る。

『ありがとうございます、助けてくれて』

『いや、まだ君を助けちゃいないよ』

逆に礼を述べる千冬に苦笑する一也。

『…一つ聞いていいですか？』

『何かな？』

『何故私を助けよう？』

『…理由は必要かい？』
会話をそこで打ち切る。

『いくぞ！』

スーパー1…一也が吠える。重力制御装置を稼働させ左手から冷却ガスを出し始める。そのまま突入する。シールドの減りはかなり遅い。油断せずに千冬は意識を集中させる。

家族を三度失った。最初は両親、次はヘンリー博士、そして赤心少林拳の皆…どれも悲しかった。辛かった。だからこそ

(…だからこそ、一夏君にそんな思いはさせない！)
もう少し…もう少しだ。一也は己の血をたぎらせる。

ふと千冬は機械的な外見をした隣の男に流れる熱き血潮を感じたような気がした。

『…綺麗だ』

千冬は呟く。突入を終えると眼前に広がった広大な空の青と海の蒼を見て素直にそう思った。

『そうだろ？』

千冬に支えられながら一也が頷く。

流星に一也もぐったりとしている。そんな一也を支えつつ千冬はある程度機能を回復したスラスターを噴かし滞空していた。

『二人とも無事…みてえだな。心配させやがって！後で一杯奢れよ！』

アレクセイからの通信だ。

『…無事で良かった』
源次郎もそれに続く。

『お帰り、千冬姉！それとありがとう、仮面ライダー！』
心底嬉しそうな一夏の声もある

『私からも…ありがとう、仮面ライダー』
千冬は改めて自らを助けた男に礼を言う。

『どういたしまして』
顔を向け答える仮面ライダースーパー1。その仮面の下にある沖一也の素顔は爽やかに笑っているのだろうな、と千冬は思った。

これ以降の織斑千冬とアレクセイ、沖一也との接点や交流があったかは分からない。ただ織斑千冬が月面基地完成パーティーに招待されたという記録が残るのみである。

(後書き)

冗長な駄文をお読み頂きありがとうございます。

拙作は単に宇宙繋がりなら面白いかな、と思って適当に書き始めたのですが予想外に文章量が多くなってしまいました。

では短くなりますが後書きの方はここで失礼させていただきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3463y/>

白と銀

2011年11月8日15時20分発行